

横光利一・作 赤い着物 より抜粋

女の子は灸の傍へ戻ると彼の頭を一つ叩いた。

灸は「ア痛ッ。」といった。

女の子は笑いながらまた叩いた。

「ア痛ッ、ア痛ッ。」

そう灸は叩かれる度ごとにいいながら自分も自分の頭を叩いてみて、

「ア痛ッ、ア痛ッ。」といった。

女の子が笑うと、彼は調子づいてなお強く自分の頭をぴしゃりぴしゃりと叩いていった。すると、女の子も、「た、た。」といいながら自分の頭を叩き出した。

しかし、いつまでもそういう遊びをしているわけにはいかなかった。灸は突然犬の真似をし

た。そして、高く「わん、わん。」と吠えながら女の子の足元へ突進した。女の子は恐ろしい顔をして灸の頭を強く叩いた。灸はくるりとひっくり返った。

「エヘエヘエヘ。」とまた女の子は笑い出した。

すると、灸はそのままひっくり返りながら廊下へ出た。女の子はますます面白がって灸の転がる後からついて出た。灸は女の子が笑えば笑うほど転がることに夢中になった。顔が赤く熱して来た。

「エヘエヘエヘ。」

いつまでも続く女の子の笑い声を聞いていると、灸はもう止まることが出来なかった。笑い声に煽られるように廊下の端まで転がって来ると階段があった。しかし、彼にはもう油がのっていた。彼はまた逆様になってその段々を降り出した。裾がまくれて白い小さな尻が、「ワン、ワン。」と吠えながら少しずつ下がっていった。

「エへエへエへエへ。」

女の子は腹を波打たして笑い出した。二、三段ほど下りたときであった。突然、灸の尻は撃たれた鳥のように階段の下まで転った。

「エへエへエへエへ。」

階段の上では、女の子は一層高く笑って面白がった。

「エへエへエへエへ。」

物音を聞きつけて灸の母は馳けて来た。

「どうしたの、どうしたの。」

母は灸を抱き上げて揺ってみた。灸の顔は揺られながら青くなってべたりと母親の胸へついた。

「痛いか、どこが痛いのか。」

灸は眼を閉じたまま黙っていた。

母は灸を抱いて直ぐ近所の医者の中へ馳けつけた。医者は灸の顔を見ると、「アッ。」と低く声を上げた。灸は死んでいた。

その翌日もまた雨は朝から降っていた。街へ通う飛脚の荷車の上には破れた雨合羽がかかっていた。河には山から筏が流れて来た。何処かの酒庫からは酒桶の輪を叩く音が聞えていた。その日婦人はまた旅へ出ていった。

「いろいろどうもありがとうございました。」

彼女は女の子の手を持って灸の母に礼をいった。

「では御気嫌よろしく。」

赤衣着物の女の子は俵の幌の中へ消えてしまった。山は雲の中に煙っていた。雨垂れはいつまでも落ちていた。郵便脚夫は灸の姉の中へ重い良人の手紙を投げ込んだ。

夕暮れになると、またいつものように点燈夫が灸の家の門へ来た。献燈には新らしい油が注ぎ込まれた。梨の花は濡れ光った葉の中で白々と咲いていた。そして、点燈夫は黙って次の家の方へ去っていった。

1999年2月24日公開

青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。